

— 論文 —

ヤオ族の評皇券牒 (I)

—— 槃瓠神話と移動経路を中心に ——

田畑 久夫

Yao Passport Píng Huáng Chuan Tieh (I)

— Focused on the Ban Ho (a dog) legend and their migration routes —

Hisao Tabata

The Yao tribe is a non-Chinese ethnic group spread and reside mainly in the south-west China as well as in the northern mountain area of Indochina, crossing the border. Their ethnic characteristics are considered to have come from their traditional form of occupation engaged in the hunting or the sifting cultivation. The hunting or cultivation for years ended up to overhunting or loss of soil fertility, so that they needed to migrate in the mountains looking for a new land. The Yao people prepared a document which showed that they were related by blood to an Emperor who was a person in paramount authority in China. This document is called the "Passport Píng Huáng Chuan Tieh". It guaranteed their safety while they were migrating in the mountain. In this paper (Part I), We examined the background of the "Passport Píng Huáng Chuan Tieh" by introducing some preceding studies and discussing the basic characters of the Yao including their history and distribution.

1. 問題の所在

中華人民共和国には、約12.5億人の人々が住んでいる（2000年統計。以下人口統計の数値はすべて2000年）。そのうちの大多数の人々は漢民族である。漢民族以外つまり非漢民族（non-Chinese）は全人口の約8%（1.0億人余り）を占めるが、これらの人々は少数民族と総称されている。その数は、中国政府が正式に認知しただけでも合計55にもものぼる¹⁾。本稿の研究対象民族であるヤオ族は、西南中国²⁾を代表する、典型的な山棲みの民族集団である³⁾。

ヤオ（瑤）族の特徴は、後に詳細に論じるが、

生活の経済的基盤とでも称すべき生業形態にみられる。すなわちヤオ族は、伝統的に狩猟あるいは焼畑農業に従事してきた。それ故、猟場あるいは耕地を長期間使用すれば、前者の場合乱獲により捕獲対象である野生動物が減少することになり、後者の場合地力が衰えたり、雑草が生い茂ることになる。そのため、猟場あるいは耕地を放棄して、それぞれ新しい場所を求めて山中を移動するという、移動生活を余儀なくされてきた。

しかしながら、ヤオ族は山中を移動するといっても、山地には所有権が設定されている場合が

多く、自由に移動するというわけにはいかなかった。そこでヤオ族の一部には、中国における最高権力者であった皇帝につながるものであるという文書を作成し、その文書を所有することで、移動の保証としたのであった。かかるヤオ族の一部が所有した文書は、評皇券牒または過山榜と称された⁴⁾。

かような評皇券牒が多くの研究者の興味を引いたのは、評皇券牒を含む各種の文書類⁵⁾が漢字で書かれていたからである。中国には、上述したように55にも達する多数の少数民族が居住している。しかし、その大部分は固有の文字を使用していない。漢字を使用しているのはヤオ族のみである⁶⁾。このようにヤオ族が漢字を習得できたのは、この集団が、既述のように伝統的に山伝いを移動するという移動生活を送ってきたことに大いに関係があると考えられる。すなわち彼らが、移動している途中において漢民族と接する機会が多くあり、その結果漢語を習得したと推定されている⁷⁾。以上の理由から、ヤオ族の評皇券牒に関しては、外国人研究者の中でも漢字を使用する日本人研究者にとくに関心もたれ、調査・研究が進められることになった。

日本人研究者で評皇券牒を含むヤオ族の間に伝承されてきた古文書類に関して、最初に注目したのは松本信廣であった。松本信廣は、昭和8(1933)年にベトナム(当時フランス領インドシナ)を訪問した際に、ハノイのフランス極東学院に「安南本」と称される安南(現ベトナム)の古文書類が収集・保管されていることを知った。松本信廣はこの「安南本」に大変興味をもち、それを謄写してもらった。そして後にその目録を論攷で発表した(松本 1943)。かかる「安南本」の中に、トンキン(Tonkin、東京、ベトナム北部の地方の旧地名)の山地に住むマン^{マン}蠻族(ヤオ族の旧称)が所有する、漢文

体で記された「蠻書」と名付けられた古文書類が一括して保管されていることを発見し、その紹介を行なった⁸⁾(松本 1941)。

すなわち、かかる「安南本」の2724と番号が付けてある諒山省禄平州蠻書の中に、「世代源流万耕火種 評皇券牒」という小冊子があり、それには槃瓠神話の異説が記載されていることに注目したからであった。というのは、当時既に、唐朝初期に魏徵等によって撰せられた『隋書』⁹⁾などの正史の記載やサヴィーナ(Savina)の研究(Savina, F.M. 1929:38-40)などにより、ヤオ族が槃瓠と呼ばれる犬を祖先としていたことが知られていた。松本信廣は、この小冊子にみられる異伝において、ヤオ族の神話として洪水伝説が登場してくることから、同様の洪水伝説を伝承しているミャオ族との間に、親縁性があったのではないかと推察した(松本 1941:782-783)。

その後山本達郎は、パリのアジア協会¹⁰⁾(Société Asiatique)に収蔵されている、収集本の一つである《Carte de Man》(函架番号2235)と題される古文書類を全文紹介すると共に、詳細な分析および注釈を加えた(山本 1955)。かかる《Carte de Man》は全44葉からなっており、「全体として漢字漢文を以って書かれているが、時には異常な文字があり、またその文章には理解しがたい個所が多く、特にその初めの部分(槃瓠神話を主体とするヤオ族の神話が中心一筆者註)に於て著しい。是は漢文の知識が足りず、またマンの言語慣習によって変典されて、異体の文章が生じたものと認められる」(山本 1955:193)という評価が与えられた。

以上松本信廣および山本達郎の両名の研究には、次のような共通した特徴がみられた。つまり、両名とも実際にヤオ族が居住している地域に出かけ、直接かかる史料を入手したのではなく、他の研究機関が収集・保管している古文書類

を紹介・分析した点である。そのため、これらの古文獻が、具体的にどこで収集されたものか、さらには所有者の名前も不明である。

これに対して、日本人研究者がフィールドサーヴェイを実施しながら、併せてヤオ族の古文獻を収集・研究したのが、白鳥芳郎が組織した上智大学西北タイ歴史文化調査団である¹¹⁾ (白鳥編 1978)。調査は1967年12月の予備調査にはじまり、1969年11月から1974年3月まで前後3回にわたり実施された。この調査の目的は、華南と歴史的にも文化的にも緊密な関係を有するヤオ族を主体に、併せてヤオ族と接触をもつその他の少数民族に関して、パイロット・サーヴェイを実施するというものであった¹²⁾。

かかる調査において、最大の成果が評皇券牒を筆頭とする古文獻類の収集であった。古文獻類の収集地点は、タイ北端に位置するチェンライ州チェンコン県キーレック盤瑤村 (Changwat Chingrai Amphoe Chiengkong Ban Yao Kirek) であった。収集した古文獻の内容は、評皇券牒、家先単、超度書、大堂魂像 (18神画像) など多種類にわたった (白鳥編 1975)。その調査団に団員として同行した竹村卓二は、主として評皇券牒を用いて、ヤオ族の種族的アイデンティティに関する論攷を作成した (竹村 1979)。かかる白鳥芳郎を中心とした上智大学の調査団によって、評皇券牒の分析を含めたヤオ族の調査・研究は飛躍的にその水準が高められたといえる。

しかしながらとはいうものの、以上の諸研究は、最大の拠点である広西壮族自治区をはじめとする西南中国に広範囲にわたって分布・居住しているヤオ族に関するものではなく、移動先であるベトナムおよびタイなどに展開するヤオ族から入手した史 (資) 料による分析であった。その理由は、評皇券牒をはじめとするヤオ族の古文獻に関しては、中国国内ではほとんどすべ

てを民族研究所などの研究機関によって収集・保管されているからである。それ故、日本人研究者を筆頭に外国人研究者は、これら一連の古文獻類を収集するのは勿論のこと、現物を手にとって閲覧することさえできないという状況であった¹³⁾。

筆者は麗澤大学外国語学部金丸良子教授と共に、1980年代前半から西南中国に分布・居住している少数民族の、主として物質文化に関する調査・研究に従事してきた (田畑・金丸 1989、田畑・金丸 1995、田畑 2003・A: 123—186 など)。その調査において、外国人研究者としては最初に評皇券牒の一種である過山榜の実物を閲覧する機会に恵まれ、その概略を紹介したことがあった (金丸 1994、田畑・金丸 1995: 195—201)。

さらにその後、タイ北部に居住するヤオ族が所有していた評皇券牒過山榜分身と表記された、異なる種類の巻物2巻を入手することができた¹⁴⁾。かかる異なる種類の2巻の評皇券牒は、内容がほぼ同一である。それ故、同じ原史料から筆写されたものと考えられる。しかしその一方には、道教の影響を受けたためか、文中に20ヶ所ほどの神などを表わす像を描いた絵が挿入されている。このように、評皇券牒は、すべてではないが直接閲覧できることになった。そのため、書かれている紙の性質や墨の色などの分析から、従来不明であった作成年代などが推定できるという可能性も出てきた。本稿でも、これらの評皇券牒を用いて分析・検討を加えることにする。

以上の日本人研究者による研究に対して、中国人研究者の研究はあまり進展していないようである。すなわち、中国国内に居住するヤオ族 (264万人強) の大半が、貴州省に接する広西壮族自治区北部 (約62.1%) や湖南省西部 (約21.5%) の山岳地帯に分布・居住している。以上か

ら中国人研究者によるヤオ族研究の主体は、広西壮族自治区であった¹⁴⁾。評皇券牒についても、それを集めた史料集が註12)において紹介したように出版されているが、広西壮族自治区で集められたものが大半を占めている。かかる史料集を中心となって整理・編集した広西民族研究所の黄鈺によると、評皇券牒と呼ぶのが正称で、過山榜という呼び方はヤオ族に伝わる俗称であるという。さらに評皇券牒には、その他20種余りの名称が付けられていると指摘する(黄 1988: 46—62)。中国ではこのように、各地に分散していた評皇券牒は、民族研究所など政府の研究機関が一括して保管しているが、未だこれらの史料を活用した詳細な分析や研究がみられないというのが、実状のようである¹⁵⁾。

以上やや詳細に評皇券牒を中心としたヤオ族の古文献に関する研究史を概観してきたが、中国各地から集められた史料はほとんどが民族研究所に保管されており、研究者であっても、自由に評皇券牒を閲覧できないという状況が現在でも変わっていない。このことから、とくに日本人を含む外国人研究者の場合、中国以外で収集された評皇券牒からの分析・検討に頼らざるを得なかった。その結果、収集された史(資)料も少なく、各種の評皇券牒を比較するということができなかった。本稿の最大の目的は、筆者らが閲覧したり、収集することができた史料を分析・検討することで、かような点を少しでも克服したいと念じているからである¹⁶⁾。

2. 山の民、ヤオ族

ヤオ族は、前項でも論じたように、西南中国¹⁷⁾のみならず、隣接するインドシナ半島北部のタイ、ラオス、ベトナムなどの山岳地帯にまで進出して展開している、非常に広い地域に居住する少数民族である。しかも近年においては、いわゆるインドシナ難民と政治的に認知された

ヤオ族の一部が、多数北アメリカ大陸を中心に定住している¹⁸⁾。

このように、大変広範囲に分布・居住するヤオ族は、ほぼ同地域に居住している山棲みの集団であるミャオ族と共に、既に指摘した如く、わが国においてその民族名称が比較的知られた民族集団といえる。その理由は、ヤオ族やミャオ族が分布・居住している雲貴高原は、緯度でいえば北緯27度付近をほぼ東西に細長く伸びているので、亜熱帯に所属すると考えられる。しかし、この高原の平均海拔高度は1000~2000mである。それ故、雲貴高原は、一部の河谷や「壩子」と称される山間低盆地を除くと、ユーラシア大陸東部の温帯南部にみられる独特の植生である、照葉樹林帯に所属している¹⁹⁾。しかも、照葉樹林文化の提唱者によれば、雲貴高原を含む地域は、照葉樹林文化の核心地域(core area、「東亜半月弧」と命名される)であるという²⁰⁾(上山・佐々木・中尾編 1976: 198—199)。すなわち、かかる地域が照葉樹林文化の提唱者が主張する、日本の固有文化の基盤となった基層文化(basic culture)の中心地域であると看做されていたからである。

かように、日本文化の源流の解明のためにも、雲貴高原を中心とする西南中国に分布・居住する山棲み集団の伝統文化に関して非常な関心をもたれたのである。具体的にいえば、ヤオ族を筆頭とする雲貴高原に展開する山棲み集団の風俗や習慣などの伝統文化を解明することが、主として明治維新以降の欧米文化の導入により、消滅する傾向が顕著にみられるようになった、わが国の伝統文化の復元の手がかりとなるのではないかと考えられたためであった。その後、照葉樹林文化を強力に提唱する佐々木高明は、日本国家の形成にも大いに関心をもつのである(佐々木 1991)。

以上略述した如く、わが国では比較的その名

称が知られているヤオ族に関しては、かかる知名度ほどまだ十分に解明されていないことが多い。例えば、現在ヤオ族の生活の経済的基盤といえは農業があげられる。この点に関して、伝統的には、焼畑農業や狩猟に従事してきたヤオ族が、国家の焼畑農業禁止などの森林保護政策の方針に従って、かような生業形態をすて、常畑や棚田を造成することが可能な海拔高度の地点まで下山して集落を形成し、定住するものが増加してきた。しかし、まだその詳細なメカニズムが知られていないことなどがあげられる²¹⁾。以下では、このような特徴がみられるヤオ族に関して、本稿の主題に深く関連すると思われる、歴史および分派集団の2項目に限定して、検討していくことにする。

1) 漢籍史料よりみたヤオ族の歴史

ヤオ族の歴史は不明な部分が非常に多い。その理由は種々考えられるのであるが、直接には以下に述べる2点が大きく影響していると推察できる。第1点は、ヤオ族自身が本来固有の文字を所有していなかったことがあげられる。ヤオ族は、評皇券牒に代表される漢文で書かれた文書類を所有している。しかし、これら一連の文書類は、本文で言及したように、彼らが移動生活を送っている過程において、漢民族と交流・接触することで、漢字やさらには漢語(中国語)を習得したものであった。そのため、漢字で書かれている文献も限られている²²⁾。したがって、自らの歴史に関してはほとんど史料としては残っていない。かような事情が存在するため、歴史に関しては漢民族が書いたり、編集した正史や地方史(志)などの記述を参考にせざるを得ないのである²³⁾。

第2点は、ヤオ族の分類に関しては言語系統上見解が大きく分かれており、確定していないということが指摘できる。そのことが、ヤオ族の故地つまり発祥地を特定する場合、大きな障

害となるからである。すなわち、ヤオ族固有の言語と看做されているヤオ語²⁴⁾は、一般には各種の『新華字典』の末尾に付けられている「少数民族簡表」などに記されているように、ミャオ族が使用するミャオ語と共に、漢・チベット語族、ミャオ・ヤオ語群に所属されるものと考えられている²⁵⁾。しかしながら、ヤオ族やミャオ族に関しては、同じく漢・チベット語族に属するか、チベット・ミャンマー語群に所属させたり(Labar, F.M. et al 1964など)、アウストロアジア語族のモン・クメール語群にされることが多かった²⁶⁾(Davies, H.R. 1909、田畑・金丸訳編 1989:413—422など)。

以上の2点の中でも、とくに前者の固有の文字を所有していなかった事実が、ヤオ族の歴史の正確な解明を困難にしているもっとも大きな理由であると推察できる。そこで、かような制約が存在することを踏まえたうえで、ヤオ族に伝わる口承伝承や正史を筆頭とする漢籍史料を中心に、その歴史を跡づけてみることにする。

ヤオ族の自称は、後で論じることになるが、居住集中地域を中心に非常に多岐にわたっている。その中でも、自称「ミイェン」(mjen²¹⁾)と称する、一般に「盤ヤオ」族と呼ばれている分派集団は、分布・居住している範囲も広く、人口も比較的多い。「ミイェン」とは、中国語の「蛮」の発音が変化したものと考えられている²⁷⁾。かかる「蛮」の祖先については、ヤオ族の間に伝わっている口承伝承や正史を筆頭とする漢籍史料の中において、語られたり、記載されている。かかる「蛮」の祖先を含めて、ヤオ族の歴史を要約した著作が存在する(《瑤族簡史》編写組編 1983:15—63)。そこで、その著作を参考にして整理・作成したのが第1表である。以下では、この第1表を参考にしながらヤオ族の歴史を検討していくことにする。

西南中国を含む華南の地を故地とする人々の

第1表 ヤオ族の居住地の変遷

時代(王朝)	居住地域	呼称(主なもの)	方向など
夏	河南省、四川省、湖南省	南蛮の一部	
楚	長江中流(湖北省中心)	荆蛮の一部	東進
秦・漢	湖南省(湘川、資江、沅江流域および洞庭湖一帯)	武陵蛮 長沙蛮	やや南進
南北朝	大別山脈周辺	莫徭	北進
隋・唐	湖南省、広西省東北、広東省北部	莫徭	南に拡大
五代十国	湖南省(資江流域、五溪地方)	五溪蛮	五溪地方に集中
宋	湖南省南部、広西省東北、広東省北部	山獠	南進・西進
元・明	広西省、広東省	深山瑤、過山瑤	南に拡大
明末～清初	広西省、広東省、貴州省、雲南省、インドシナ半島北部	深山瑤、過山瑤	北、南に拡大

〔出所〕《瑤族簡史》編写組編(1983):『瑤族簡史』(中国少数民族簡史叢書)広西民委出版社より作成

集団は、漢民族によって「蛮」あるいは「南蛮」と総称された。かかる蛮とは、古代中国の夏王朝(紀元前21世紀ごろ～紀元前16世紀)において非漢民族つまり少数民族が分布・居住している地域に従って、おおまかに夷、戎、蛮、狄の4種類の集団すなわち「四夷」に区分したうちの1つの集団である。この4種類の区分は、当時の政治・文化の中心であり、交易の結節点であった、華北の黄河中流に位置する洛陽盆地を中心にされたものであった。すなわち、洛陽盆地からみて東方に位置する集団は東夷と呼ばれた。以下同様に、西方に居住する集団は西戎、南方に分布する集団は南蛮、北方に展開する集団は北狄とそれぞれ称されたのであった。その中で南蛮の居住地は、長江に沿う河南省・四川省および湖南省の山岳地帯と推定され、彼らは主として焼畑農業や狩猟を主体に生活を送っていたと看做されている。

かかる南蛮は、春秋・戦国時代(紀元前770～紀元前221年)に勢力を奮った楚によって統合・支配されることになった。その後楚は、紀元前3世紀に秦によって滅されたが、南蛮を含

んだ楚の住民は勝利した秦の住民から荆蛮と呼ばれた。荆蛮の大多数は、秦王朝(紀元前221～紀元前206年)の時代に入ると、次第に漢民族の社会に同化・吸収されることになった。しかし一部は、秦王朝の支配を嫌い、そこから逃れるために、南方の湖南省を中心とする華南の地へと移動していった。

その後秦王朝を受け継いだ漢王朝の後漢の時代(25～220年)になると、上述の華南の地に荆蛮の子孫と名乗る武陵蛮あるいは長沙蛮と呼ばれる集団が登場してくる²⁸⁾。これらの両集団は、漢王朝を建設した漢民族に対して度々厳しい反抗や反乱を繰り返した。しかし、かような反抗や反乱はことごとく失敗した。その中でもとりわけ武陵蛮の反抗・反乱は激しく、漢民族を非常に困らせたのであった。この武陵蛮には「槃瓠」と称する犬が祖先であるという槃瓠神話を有していた²⁹⁾。

南北朝時代(420～589年)になると、上記の武陵蛮の一部が北方に進路をとり、長江を越え、淮河との間に位置する大別山脈にまで到達した。その後さらに北進し、淮河を越えようとするが、

漢民族の強力な抵抗にあい、再度先住地である沅江上流域に引き返した。その当時漢族からは莫徭と呼ばれていた。

続く隋・唐時代（589～907年）になると、莫徭の居住地は湖南省を中心に広西や広東両省の一部にまで拡大した。そして次の五胡十国時代（907～960年）になると居住地はさらに拡大した。その中でも、湖南省の長江支流資江流域および五溪地方が集中地域であった。とりわけ後者に集中した集団は、その地名をとって五溪蛮と称された。同様の居住空間の拡大傾向は次の宋代（960～1279年）まで続いた。宋代では、その分布地域の西端は広西省の静江村（現広西壮族自治区桂林市）付近まで進出した。

元・明時代（1279～1644年）になると、西南中国に分布・居住する少数民族の中でもヤオ族はミャオ族と共に、これまで以上に朝廷から厳しい圧迫を受けることになった。理由は、両民族があくまで独自の民族社会を堅持しようとし、元および明の両王朝に対し反抗を続けるなど、強力な抵抗を試みたからであった。

これに対して、元王朝の少数民族政策をそのまま踏襲した明王朝は、「夷を制するには夷をもってす」という政策を実施した。周辺に居住するトゥチャ（土家）族や熟苗³⁰⁾などの少数民族を主体とした軍隊である土兵を組織し、その鎮圧にあたらせたのである。次の清王朝（1644～1911年）においても、同様の徹底した分割統治を取り続けた。すなわち清王朝の初期では、前王朝である明王朝の少数民族政策をほぼ継承した。その政策とは、西南中国に住む各少数民族のリーダーの中から1名の土司を任命し、その土司に中央政府が行なうべき貢賦と軍事に関する徴発を行なわせた。このようにして清王朝は土司に一定の権力をもたせ、統治を行なわせた。しかし、土司の一部が権力を掌握することで王朝に反抗したり、さらには土司間の抗争も

生じた。そこで、これらの土司が管理・支配している地域に、流官（中央政府により派遣された役人）を配するという「改土帰流」と称される、新しい統治制度を確立した。また清王朝は、服属する少数民族の居住地域においても、漢民族居住地域のように府県制を採用しなかった。

以上述べた元・明・清の3王朝とりわけ明・清の両王朝による少数民族弾圧政策に対して、ヤオ族はミャオ族と共に反抗や反乱を幾度となく試みた。しかし、これらの企てはすべて失敗を喫した。そこでヤオ族は、明王朝の弾圧や圧迫から逃れるためにさらに南進し、広西および広東両県北部の山岳地帯にまで進出していった。これらの地域は、当時のヤオ族の主要な集結地域となった。その後もヤオ族は南進を続け、清王朝時代になると、広西および広東両省に隣接する貴州省や雲南省南部の山岳地帯にまで進出する人々が増加した。またその一部は、国境を越えてインドシナ半島北部の山岳地帯にまで展開する集団も出てきた。このような移動は現在でも多くはないが認められる。以上が伝承および漢籍史料の記載などから推定される、移動を中心とした歴史である³¹⁾。

2) 多岐の分派集団（支系）

ヤオ族の歴史は、移動の歴史であったといっても過言ではない。具体的な移動に関しては前項でも論じたように、時代によって主要な居住地が異なることが多かった。その最大の理由は、彼らの生業の中心が焼畑農業および狩猟という、移動を余儀なくさせられる生活様式にあっただけではなく、歴代の王朝による弾圧・圧迫政策に対する反抗や反乱の失敗から徹底的に弾圧され、それから逃れるための移動であった。かような歴史的な経緯が存在したので、現在のヤオ族の居住範囲は、広西壮族自治区北部の山岳地帯にまで達している。

このように、ヤオ族は非常に広範囲の地域に

展開しているため、彼らが着用している民族衣裳や、日常的に使用している言葉に関して、地域差がみられる。現地において、漢民族や他の少数民族すなわち異民族がもっとも目立つのは、日常的に着用している民族衣裳の色彩である³²⁾。というのは、ヤオ族が話す言葉は異民族ではほとんど理解できないからである。そのため現地では現在でも、主として常用している民族衣裳の色彩により、個々の支族名が付けられているのである³³⁾。例えば、貴州省には合計6種類のヤオ族の支族が存在する。以下にみられるように、かかる支系の名称は、常用している民族衣裳などに因んでいるものが多い(柏・史・石 1990、田畑・金丸 1995:122—124など)。

貴州省の南部に居住するのは「白褲ヤオ」族、「青褲ヤオ」族および「長衫ヤオ」族の3支族である。「白褲ヤオ」族は、主として男性が着用する膝までの比較的短いズボンの色が白色であるため、かように称されている。このズボンの素材は麻布である。麻布は藍染めなどに適さないため、染められない。そのため、ズボンは麻布の色に近い白色となる。女性の服装には上衣に特色がみられる。すなわち上衣は、1枚の布に頭を通す穴だけをあけた貫頭衣を着用している。

「青褲ヤオ」族は、「白褲ヤオ」族同様、男性が青色をしたズボンをはじめ、上衣も青色に染められたものを着用している。この支族の衣服も、かように青色を呈しているのは、藍染めした綿布でつくられたズボンを着用しているからである。なお「青褲ヤオ」族は「青ヤオ」族と呼ばれることもある。「長衫ヤオ」族も「青褲ヤオ」族と同じく、男性が藍で染めた綿布製のズボンを常用していることに由来する。しかし、彼らは「青褲ヤオ」よりも丈の長いズボンを好むため、このような名前では呼ばれているのである。以上の3支族は、ほぼ同じ地域の山岳地帯

に居住しているが、とくに後者の「青褲ヤオ」族と「長衫ヤオ」族とは互いに接近して分布・居住している。

貴州省の東南部に主として居住するのは、「盤ヤオ」族と「紅ヤオ」族の2支族である。前者の「盤ヤオ」族は別名「板ヤオ」族とも称される。女性が結婚時にかぶるターバン状のものが木板のような平らな形をしているからである。すなわち、かかるターバン状のものは「ブ・パン」(bu bian、卜扁)と呼ばれる。「パン」(扁)は現地語で「板」とも発音する。そのことから「板ヤオ」族とも称されることになった。そしてそれが転じて、「盤ヤオ」族と呼ばれることになったのである。後者の「紅ヤオ」族は、女性が着用している上衣の色によって、このように命名された。この支族は、周辺地域に居住する他の少数民族や地元の研究者の間では、「狗頭ヤオ」族と称されている。理由は、女性がスカートの上に付けているエプロンの帯の結びに因んでいるという。つまり女性はエプロンの帯を後で結ぶのであるが、その結びを強しないでゆるめて結ぶ。そうすると両方の帯先は下に長く垂れる。その垂れた帯の先端が「狗」すなわち犬の爪先に類似しているからである。

貴州省の西部の山岳地帯には「油邁ヤオ」族が居住している。この支族名称は、貴州省に居住する他の支族とは異なり、居住している地名に由来している³⁴⁾。

以上論じたように、現地においては、主として常用している民族衣裳などによって、支族を区分していた³⁵⁾。しかしながら、かような分類は便宜的な区分とされ、中央の研究者レベルではこの分類に代わって言語系統的な区分が主体となっている。かかる理由の一つに、一般にヤオ族と称されている民族集団の中に、明確に言語系統の異なる集団が含まれているからである³⁶⁾。以下では、かかる区分を行なった盤朝月の論攷

(盤 1988) を基本資料として検討していくことにする³⁷⁾。

盤朝月によれば、中国国内に分布・居住するヤオ族は、言語系統上分類すれば、各々の支族が日常的に話している言葉によって、大きくヤオ語系、ミャオ語系、トン・スイ語系および漢語方言の4つに分かれると指摘する。ヤオ語を話す支族はもっとも多くを擁し、人口数約75.5万人³⁸⁾(1982年統計)で、ヤオ族全体の約55%を占めている³⁹⁾。この語系に所属するヤオ族は、「盤ヤオ」族と「八排ヤオ」族に二分できる。前者の「盤ヤオ」族は、自称「ユーミエン」(ju³¹mjen²¹)という過山ヤオ族に所属している。

過山ヤオ族とは、特定の場所に定着して、山腹斜面に造成した棚田などにおいて、主として天水利用による水田稲作や段々畑でのトウモロコシ栽培に従事するのではなく、従来より実施してきた焼畑農業などを経営しながら、山中を移動し続けてきた集団の総称である。かかる点は、その名称ともなっている「過山」という用語からも類推できる。評皇券牒を筆頭に各種のヤオ族文書を所有しているのも、この集団のみである⁴⁰⁾。かかる特色を有する「盤ヤオ」族は、さらに「ユーミエン」(伧勉)、「ジンメン」(金門)、「ピアオミン」(瓢敏)、「ピアオマン」(瓢満)と各々呼ばれている方言を話す亜支族に分かれている。

「八排ヤオ」族は広東省北西部珠江支流北江上流域を主たる居住地とし、深山ヤオ族に所属している。深山ヤオ族は、「深山」すなわち山奥に居住する典型的な山棲みのヤオ族集団の総称である。つまり、この集団は、比較的海拔高度の高峻な山脈の尾根筋や山頂付近に集落を形成するという共通した特徴がある。前者の過山ヤオ族と異なるのは、この集団が伝統的に移動を行わず、一定の場所に定着して閉鎖的な生

活を送っている点である⁴¹⁾。「八排ヤオ」族と呼ばれることになったのは、入植した当初8ヶ所の集落を形成したことによるとされる。なお「排」とは集落を意味し、彼らの住んでいる家屋が櫛の歯状に整然と並んでいる状態を示しているためであるという(竹村 1891:8)。また「八排ヤオ」族は、自らがヤオ族の正統であると自認している(胡 1966:186)。

以上の「盤ヤオ」族と「八排ヤオ」族の居住地とが共に広西壮族自治区北西部の大瑤山周辺地域であることから両支族の居住地がほぼ重複していることによるのであろうと考えられている。

ミャオ語系の言葉話す支族は、ヤオ族の約31%と多くない。しかし、この支族に所属する集団は、「布努ヤオ」族、「花ヤオ」族、「白禪ヤオ」族、「紅ヤオ」族、「花藍ヤオ」族、「藍靛ヤオ」族をはじめとして、非常に多い。かように多くの支族がみられるのは、時代が経過するに従って、各地に分散して居住することになったため、各集団間の相互交流が困難になったことに加えて、それぞれの地域での自然環境に適應するために、独自の生活様式を採用することになったからであると推察される。それ故、かかる支族の共通の特色としては、過山ヤオ族に代表される移動性よりも、土着的な要素をもつ定住性がみられる点あげられる。

またこの支族は、ミャオ語を話すことから、ミャオ語とヤオ語とが分離・離立する以前の状態を残している集団であるとも考えられる。しかしながら、同じミャオ語系に所属するといっても、各支族間での交流関係がほとんどみられず、通話もできないことが多い。分布地域も広範囲にわたり、広西壮族自治区を中心に湖南省や貴州省にも展開している。

トン・スイ語系の支族としては、「茶山ヤオ」族と「那溪ヤオ」族の2集団だけが所属してい

る。しかし、両支族間ではほとんど会話が成立しない。前者の「茶山ヤオ」族という名称は、広西壮族自治区東北部に位置する茶山という地名に関連して付けられた。現在でもこの支族は、茶山一帯を主要な居住地としている。中華人民共和国成立以前は、男性が髪を伸ばし、結う習慣がみられたことから、「長毛ヤオ」族とも呼ばれた。後者の「蕪溪ヤオ」族は、湖南省洞口県蕪溪ヤオ族郷にのみ居住する小規模な集団である。

漢語方言を話す支族は「平地ヤオ」族や「白領ヤオ」族などが該当する⁴²⁾。「平地ヤオ」族は、山間盆地などの平坦地に居住している。そのことから、かような名称が付けられた。この支族は、「盤王」を崇拜する伝説をもっているため、「盤ヤオ」族と近い集団であると看做されている。また彼らは、平坦地に定着してから次第に母語を失い、同じ地域に居住する漢民族が話す漢語方言を習得し、それを話すようになったといわれている。主要分布地域は広西壮族自治区東部と、湖南省南部の開けた地域である。

一方「白領ヤオ」族は、その名前の起源が男性が白い裾を付けた衣服を着用していることに由来するとされる。この支族は、袁、梁、侯、藍の4姓が中心なので、別名「四姓ヤオ」族と称される。彼らが使用している言葉は漢語方言が主体であるが、一部ではヤオ語系に近い言葉を話している。主要分布地域は広西壮族自治区北東端の漢陽県に限定される。両支族合わせても人口は多くなく、約17.4万人(1.25%)である。

以上盤朝月の論攷を手がかりとして、言語系統を中心にヤオ族の支族を検討してきた。その結果、一般にヤオ族と呼ばれているカテゴリーに分類されている支族においても、例えば、ミャオ・ヤオ語群とトン・スイ語群というように、下位の語系レベルではなく、上位の分類カテ

グリーである語群レベルすら異にしている集団がみられることが判明した。かかる点は、既に指摘したのであるが、ある特定の民族を他の民族と区分する最大のメルクマールが同一言語を母語としているとすれば、異なる語群に所属しているヤオ族の支族は、同一の民族であるとはいえないのではないか、という疑問をいだかせる。ヤオ族の支族は民族という概念を再考する事例といえよう⁴³⁾。

3) 主要分布地域

ヤオ族の分布・居住地域は非常に広範囲に及んでいる。そのため、時間の経過と共に、展開する集落が分散することになり、互いに交渉などが疎遠になってきたことや、それぞれの地域に居住している他の民族集団と接触・交流する集団も増加してきた。このような結果から、一般には前項でも論じたように、同一集団でありながら、日常的に話している言葉が大きく4つに分類できるほど、複雑な言語体系を有する集団へと成長した。本項では、かかる言語系統上の議論を受けて、非常に広範囲に分布・居住するヤオ族の分布状況を検討していくことにする。

ヤオ族の分布に関しては、竹村卓二の詳細な考察(竹村 1981:5-13)が既に存在する。本項では、かかる竹村卓二の分布に関する考察を参考にしつつ、独自の分布を検討していくことにする⁴⁴⁾。

竹村卓二は、ヤオ族の分布地域を主として漢籍史料を使って分析した結果、中華人民共和国成立直前の1940年代前半のヤオ族の主勢力つまり主要分布地域を次の4地域であると指摘した(竹村 1981:6)。

- (1) 浙江、福建両省にまたがる脊梁山脈沿いに拡散するショオ族('She'《畲》)と呼ばれる亜種族(支族のこと一筆者註)
- (2) 広東省のヤオ族(特に北西部の北江上流の翁源、乳源、曲江、樂昌、陽山、連、始

興などの諸県管内の各瑤山)

(3) 広西壮族自治区のヤオ族 (特に東北部の桂林、義寧、興安、霊山の各県に跨がる山塊、東部の桂平、蒙山、昭平、武宣、平南、象、修仁の各県が交界する大藤瑤山、さらに西部の凌樂県およびその近辺の諸瑤山)

(4) インドシナ北部のマン (Man) 各亜種族
以上の分布は、竹村卓二が述べているように、1940年代前半の分布状況である。しかし、その後現在までの期間において、ヤオ族の大移動が認められないので、ヤオ族の現在の主要な分布地域を表現していると看做してもよいと思われる。

しかしながら、(1) のシヨオ (畬) 族と呼ばれている民族は明確にヤオ族の分派集団 (支族) と言い切れるだろうか。確かにシヨオ族は、ヤオ族にみられる槃瓠犬祖神話を所有しているので、ヤオ族の一支族であるとする見解 (松村 1973: 239) も存在する。ところが本文でも言及したように、槃瓠神話は漢民族と武陵蛮との接触・交流後はじめて広まったもので、ミャオ族とヤオ族が明確に分化するまでは、かかる神

話は両民族を含めた武陵蛮の子孫に伝承された神話であった。そのことから、槃瓠犬祖神話を伝承しているという理由だけでは、ヤオ族であると断言できない。

さらに、シヨオ族に関する中国人研究者による総合調査 (《中国少数民族社会歴史調査資料叢刊》福建省編輯組編 1986) の結果を整理した第2表を参照すると、次のことが判明した。すなわち、シヨオ族の主要分布地域である浙江、福建両省では、周辺に居住している他民族から畬客、野人などと呼ばれ、ヤオ族と呼ばれていないのみならず、自称もミャオ (苗) 族と称している集団も存在するほどである⁴⁵⁾。以上の2点から、本項では浙江、福建両省を中心に分布しているシヨオ族に関しては、ヤオ族の支族と断定するには資料不足であると考え、ヤオ族の主要分布地域からシヨオ族が分布している (1) の地域を省略することにした。

また現在においても、広西壮族自治区には中国に住むヤオ族の約62.1%が分布しているが、湖南省にも約21.5%のヤオ族が居住している。それ故、これらの現在のヤオ族の分布状況を配

第2表 シヨオ族の呼称

省・自治区	県・市	調査地	自称	他称
浙江	景寧県	東衢村	苗民	畬客婆
浙江	平陽県	玉神洞村	前客 苗族	山客
浙江	泰順県	竹垞郷	—	畬客婆 畬客古
浙江	麗水市	—	山客	畬客婆
福建	寧徳県	后山郷など	苗族 瑤族	畬姻 蛇人
福建	羅源県	八井村	山客	畬客
福建	福安市	—	—	畬客 山客
福建	福安市	甘棠郷	山客	臭畬客 臭畬姻
福建	福鼎県	—	山客	蛇民 邪婆
福建	霞浦県	—	山客	臭畬牯 臭畬姻
江西	—	—	山客	野人頭 野人婆
江西	鉛山県	太源村	苗民 山哈	野人 野人婆
安徽	寧国市	雲梯村	山哈	下客老
広東 ^①	恵陽市、海豊県	—	賀爹	峯
広西壮族	潮安県	鳳凰地区	—	畬族

註) — は不明、①は地方誌の記述による

〔出所〕《中国少数民族社会歴史調査資料叢刊》福建省編輯組編 (1986) : 『畬族社会歴史調査』 (国家民委民族問題五種叢書之一、中国少数民族社会歴史調査資料叢刊) 福建人民出版社より作成

慮するならば、竹村卓二の唱える(2)の分布地域を広東省のみではなく、隣接する湖南省南部にも拡大する必要があると思われる。そこで、かかる分布地域を広東および湖南の両省にまたがる南嶺山脈周辺地域と変更したい。

なお(4)のインドシナ半島北部に分布するヤオ族は、多くが「ユーミイェン」と自称している過山ヤオ族である。それ故「マン」を「ユーミイェン」と改めることにする。

以上を要約するとショオ族の主要分布地域は、
 (a) 広東・湖南両省にまたがる南嶺山脈周辺
 (b) 広西壮族自治区北部
 (c) インドシナ半島北部
 の3地域がヤオ族の卓越地域となる。以下では、それぞれの地域の特徴を簡潔に述べておくことにする⁴⁶⁾。

(a) 地域は、深山ヤオ族および過山ヤオ族の両集団が分布・居住している。しかし、各々の居住空間に関しては、前者の深山ヤオ族が海拔高度の高い場所に住み、後者の過山ヤオ族が比較的海拔高度の低い、開放的な山麓地帯に展開するという海拔高度差による住み分け現象がみられる。そのため、生活の経済的基盤とでも称すべき生業形態においても、農業が主体であるが、両集団では微妙に相違がみられる。つまり、深山ヤオ族では、山間部の非常に奥まった空間に棚田を造成し、天水利用による水田稲作を中心に行ない、閉鎖的な社会を形成している。一方過山ヤオ族は、生業形態では前者同様水田稲作が中心であるが、焼畑経営という伝統も継承しつつ、一部では山地特有の特産物などを周辺の人々に販売するなどして、他民族との接触による交易などを行っている。当地域に居住する深山ヤオ族としては「八排ヤオ」族が、過山ヤオ族としては「盤ヤオ」族や「八洞ヤオ」族が代

表とされる。

(b) 地域は、一部で熱帯カルスト地形が卓越していることから、(a) 地域よりも土地条件が劣悪である。にもかかわらず、この地域がヤオ族最大の集中地区となっている。分布上の特色としては、居住している支族が各々「平地ヤオ」族、「紅頭ヤオ」族、「盤古ヤオ」族、「藍靛ヤオ」族、「茶山ヤオ」族、「長頭ヤオ」族と称されているように、集落立地、服装(頭飾)、信仰、生産、地名、髪型など種々のメルクマールで各支族が呼ばれていることである。そのため、ヤオ族の支族の分類がこの地域ではより複雑なものにしている。主要な生業は、(a) 地域同様、棚田での水田稲作である。しかし、土地条件の劣悪な所では水田稲作が行なえないので、トウモロコシの栽培が中心である。

(c) の地域は、タイ、ラオス、ベトナムなどの山岳地帯が中心である。この地域に展開しているのは、大半が華南から移動してきた過山ヤオ族の「盤ヤオ」族である。居住地は、ベトナムのドンバン(Don Van)高原に代表されるように、カルスト地形が卓越する土地条件が大変劣悪な場所が多い。それ故、稲作には不適當なので、主食はトウモロコシ主体となっている。なお同地域にはミャオ族も分布・居住しているが、当地域ではヤオ族の方が早く移動してきたためか、中国国内とは逆にミャオ族の方がヤオ族より高所に住む傾向がみられる。

註

- 1) 中国では、個々の民族集団の申請に基づき、政府が正式に認知した集団のみを少数民族と称している。それ故、例えば、貴州省に居住するグージャ（倭家）と称している集団のように、度々申請したにもかかわらず、人口規模が小さいという理由から少数民族として認知されていない集団も存在する。
- 2) 中国語には、「西南中国」という用語が存在していない。一般には、「西南区」と称されることが多い。西南区の範囲は、雲南省全域と四川省を含む比較的狭い地域を指す（任主編1982、阿部・駒井抄訳 1986:181）。本稿では、わが国の通例に従い、雲南・四川・貴州の3省を含む広い範囲を西南中国と看做すことにする。なお、西南中国に居住・分布する山棲み集団としては、ヤオ族の他にミャオ（苗）族やイ（彝）などがあげられる。
- 3) 西南中国とりわけその中心地帯を占める雲貴高原には、スイ（水）族やプイ（布依）族に代表されるように、河谷流域や現地で「壩子」と呼ばれている山間低盆地に展開している民族集団と、ヤオ族を筆頭にミャオ族、ハニ（哈尼）族など山腹斜面に居住する山棲みの民族に、大きく二分することができる。両者は共に現在では稲作を中心とする農業が生業の中心であるが、前者では河川水利用の水田稲作、後者では天水中心の棚田による水田稲作を主として行っている。
- 4) 評皇券牒は文字通り訳せば、皇帝が与えた書類（契約書）という意味である。ヤオ族にとっては「身分保証書」のような意義があった（竹村 1981:260）。またこの文書は山中を自由に移動してもよいという証明書という意味で、過山榜と称されることも多かった。
- 5) 祈禱文書などの宗教的經典、「家先単」と呼ばれる家譜（族譜とも称される）、年中行事や農耕儀礼などに関する慣習法、年表など。
- 6) 1949年10月の中華人民共和国成立後、主として1950年代後半より、固有の文字を所有しない少数民族の言語が漢字で表記されるようになった。そのため現在においては、固有の文字をもたない、すべての少数民族の言語は漢字で表記

されることになった。

- 7) ヤオ族の移動は、個人あるいは一家族単位で行なわれるのではなく、親戚などの同族単位で移動したようである。しかも、移動するといっても絶えず移動したのではなく、1ヶ所に同族と中心とする集落を形成し、そこで、狩猟あるいは焼畑農業に従事し、数世代後に他に移動するという方式が採用された。かかる事実は、ヤオ族の移動先の最先端のひとつであるベトナム北部のドンバン（Don Van）高原に居住するヤオ族が複数の同族によって集落を形成し、数世代を経過すると移動していることなどから、類推可能である。ヤオ族は、狩猟や焼畑農業を行なうと共に、製茶や製紙（和紙）などの製作も副業的に行ない、近くで開催される定期市などに持参したり、あるいは行商して換金していた。製茶や製紙が換金商品として選ばれたのは、材料となるチャ（*Camel sinensis* 茶）やコウゾ（*Broussonetia kazinoki* Sieb. 葡蟠）などが山地に豊富に存在すること、および商品が軽量なため運搬に便利なためである。ヤオ族は、定期市などの販売先で漢民族と接し、漢語（中国語）を覚え、漢字を学習したと思われる。（田畑他 2001:179）。
- なお、ほぼ同地域に分布・居住し、移動生活に従事していた。典型的な山棲み集団であるミャオ族は、副業として製茶や製紙などの商品を製作しなかった。そのため漢民族と接触する機会が少なかった。ミャオ族は、そのことなどが原因で、ヤオ族とは異なり漢字を学習する機会がなかったと推察される。
- 8) 発見した当時、これらの各地のヤオ族から収集された古文献類は、整理・分類されず、一括して目録に載せてあるという状態であった（松本 1941:770）。
- 9) その一部に、「諸蛮本所出、承盤（槃の異字—筆者註）瓠之后。故服章多以班布為飾。…（中略）…長沙郡又雜有夷蜒、名曰莫徭、自言其先祖有功（下線—筆者註）」（魏微等撰『隨書』卷31、志第26〈地理・下〉）とあり、民族名称が下線で示したように莫徭つまり徭役のないものという、かかる集団の特別な地位を示す言葉で記されている。

- 10) 1900年ごろマスpero (Maspero, H) 教授がベトナムにおいて収集したもので、当時ハノイのフランス極東学院に所蔵されていた。
- 11) 調査団のメンバーは、白鳥芳郎、八幡一郎、江上波夫、量博満、中塚発夫、竹村卓二ら合計12名であった。
- 12) かように、評皇券牒をはじめとするヤオ族の古文書類の現物の閲覧は困難をきわめた。しかし、民族研究所などに収集・保管された評皇券牒に関しては整理・活字化され、単行本として出版されている(瑶族《過山榜》編輯組編 1984)。また以前には内部資料扱いで、外部者には閲覧することができなかった広西壮族自治区に住むヤオ族に関する社会歴史調査の報告書も、次々と公開・出版されだした。その中に一部ではあるが、評皇券牒が活字化されている(例えば、広西壮族自治区編輯組編 1984『広西瑶族社会歴史調査 第1冊』:263—271など)。
- 13) 異なる種類の2巻の評皇券牒は、現在金丸良子が保管している。なお、同評皇券牒に関しては、その一部を紹介したことがある(田畑 2004:80—81)。
- 14) 例えば、広西壮族自治区に展開するヤオ族について、非常に詳細な大部の調査報告書も出版されている(広西壮族自治区編輯組編 1984—1987)。
- 15) ヤオ族に関する国際討論会が、1986年5月に香港中文大学で開催された。その討論会の正式の報告書(喬・謝・胡編 1988)には20編にもよる論文が収録されている。しかし、評皇券牒を分析したのは本文で言及した黄鈺の論攷(黄 1988)のみであった。なおベトナムにおいても、1995年12月に国際ヤオ族学会ワークショップ(於バクタイ Bac Thai市)で開催された。そのワークショップにおいて評皇券牒に触れたのは筆者らの報告(田畑・金丸 1996)だけであった。
- 16) ヤオ族居住地区をはじめ、西南中国の少数民族地帯は、中国の市場経済政策の導入などにより、近年、外国人が自由に立ち入ることを禁止する、いわゆる対外「未開放地区」の指定が解除された。しかしながら、対外「未開放地区」の指定が解除されたといっても、ヤオ族居住地区には、ほとんど立ち入って調査を実施することが、種々の事情から依然として困難であるという状態が続いている。そのためか、筆者らを除いて、中国国内ではヤオ族の調査が行なわれず、現在でもヤオ族調査の中心は移動先であるタイ北部の山岳地帯に限定されている。
- 17) 既に指摘したように、ヤオ族の最大の集結地域は広西壮族自治区北部の山岳地帯である。この地域は厳密に言えば西南中国に該当しない。しかし、西南中国を代表する高原である雲貴高原の東端が、中国国内では広西壮族自治区に次いで集中している湖南省西部の山岳地帯を含めて、雲貴高原の一部を形成している。また少数ではあるが、ヤオ族は雲貴高原のほぼ全域にわたって分布・居住している。以上のことから、本稿では、ヤオ族を西南中国に居住する山棲み集団として、論を展開している。
- 18) 本来、政治的難民として他国に流出し、定住した人々が、本国に帰国することは従来ほとんどできなかった。しかしヤオ族の場合、国際的な討論会に参加するという形式であれば、帰国できるようである。筆者も、かような形式でラオス・ベトナムのヤオ族の難民が、本国つまりラオス・ベトナムに一時的ではあるが帰国し、出身地の集落まで帰ったケースを、註15)で述べた1995年にベトナム北部の都市バクタイ市で開催された国際ヤオ族学会のワークショップでみたことがある。
- 19) 現在使用されているような意味で照葉樹林という生態学的用語を最初に提唱したのは、吉良竜夫であった(上山編 1969:66—67)。この間の事情に関しては拙著(田畑 2003・A:17—20)を参照のこと。
- 20) 周知のように「東亜半月弧」は、アッサムから雲南にかけての地域を指すが、その中でもとくに雲南が注目されることになったのは、現在においてもインド北東端に位置するアッサム地方は調査が非常に困難な場所である。それ故、比較的調査の可能性が出てきた雲南が注目されたのである。
- 21) かかる点を克服する目的で、筆者らはヤオ族の生業形態を筆頭とする物質文化を中心とするフィールドサーヴェイを行ない、それに基づい

たモノグラフを長年作成し続けてきた。その調査・研究の成果の一部は、著作(田畑・金丸 1995など)として出版している。

- 22) 同様の事例は、トンパ(東巴)文字をもっているナシ(納西)族や水書を所有しているスイ(水)族などの少数民族についても該当する。すなわち、これらの少数民族は固有の文字を所有しているが、語彙が少なく、一般には普及していない。使用される場合は、教典やシャーマン(座師)が祭文を読むなどの宗教的活動に限定される。
- 23) といっても、漢民族が書いたり、編集した史料は、例えば、魏志倭人伝にみられる倭人についての記述のように、中華思想の影響や、あるいは王朝の正統性を擁護する目的などから、撰者陳寿による歪曲とまではいかないにしても、事実に基づいた正確な記述でないと思われる箇所が存在する。それ故、厳密に言えば、これらの漢籍史料のみに依存することはできないのである。
- 24) 後述するが、ヤオ族と自認し、他の民族集団からもヤオ族と看做されているが、ヤオ語を話すこともできないし、理解することすらできない集団も存在する。かかる点も、ヤオ族の歴史を考える場合複雑にしている原因の一つである。なお同様の事例は、ヤオ族とほぼ同じ地域に展開するミャオ族の場合も該当する。
- 25) 日本でもかかる分類法によるものが多い(松村 1973:206—228、田畑他 2001:237など)。なお、現在中国の言語学において用いられている言語系統上の分類方法では、語系→語族→語支というように細分化されている。本稿では、村松一弥(村松 1973:30)にみられるように、日本での常用に準拠して、語系を語族に、語族を語群に、語支を語系に改めた。また、わが国の分類では、シナ・チベット語族、チベット・ビルマ語群などと称することが多いが、各々漢・チベット語族、チベット・ミャンマー語群に変更した。
- 26) つまり、後者とりわけアウストロアジア語族、モン・クメール語群にヤオ族の言語が所属しているとすれば、ヤオ族の故地が中国ではなく、インドシナ半島南部になるからである。とくに、

欧米人を中心とする外国人研究者の場合、ヤオ・ミャオ両語を、アウストロアジア語族、モン・クメール語群に所属させる見解が強かった。理由は、欧米人のインドシナ半島の少数民族に関する研究者は、多くがタイあるいはベトナム南部の海岸地帯から内陸に入り、調査に従事した。その結果、インドシナ半島の先住民は、インドシナ半島南部の海岸地帯に広く分布・居住しているモン・クメール語群の集団が、メコン川やチャオプラヤ川をはじめとする大河川を北上したと看做したようである。このような従来の分類に対して、ベトナムで発行された最新の少数民族の概説書(Đặng Nghiê m Văn et al 2000:2)などでは、ヤオ族(ベトナムではザオ(Dao)族)、およびミャオ族(同モン(Hmông)族)は、完全に独立した言語系統に所属する集団として分類されている。

- 27) インドシナ半島北部に分布・居住するヤオ族が、従来「マン」(Man)族と称されることが多かった(山本 1955など)のは、「ミイェン」が転化したものであろうと推定される。
- 28) 武陵蛮の武陵は地名で、湖南省の長江支流沅江上流域を指す。また長沙蛮の長沙も地名で、同様に長江に流れ込む湘江中流域をいう。
- 29) 現在ヤオ族とほぼ同じ地域に展開しているミャオ族も、その祖先がヤオ族同族南蛮→荊蛮→武陵蛮であるという伝説を有している。両民族は祖先が共通するのである。ところが、両民族が伝える祖先に関する神話はまったく異なった内容である。ミャオ族では、大洪水から逃れて生き残る兄(伏羲)とその妹(女媧)が結婚して子孫を増やすという、洪水・兄弟結婚神話が語られている。一方、ヤオ族では、本文でも述べた槃瓠と呼ばれる犬が祖先であるという槃瓠犬祖神話が存在する(田畑他 2001:63)。

以上のように、ヤオ・ミャオ両民族においては、祖先に纏わる神話が明確に異なっているが、明王朝(1368~1644年)まで槃瓠犬祖神話が、武陵蛮全体の子孫に伝わる伝説として広く信じられてきたのである。すなわち、この時期まで、ミャオ族も武陵蛮の子孫であったが故に、かかる神話を祖先に纏わる伝説としてきたのである。しかしながら、かかる両民族は互いに異なる集

団であると主張し、同一集落に同居することや、通婚をはじめとする交流もたなかった。

- 30) 少数民族や先住民に対して、支配民族の習俗や慣習などの文化を受け入れた人々、すなわち教化された集団を熟苗というように、「熟」という言葉を冒頭に冠して呼び、種々の特権を与え保護した。これに対して、自民族のアイデンティティを堅持し、かかる支配民族の文化などを受け入れることを拒否し、支配民族に反抗や反乱した集団を生苗と称したように、「生」という言葉を冒頭に冠して区別した。かかる区別は、支配民族の「アメとムチ」の政策であった。かような政策は第2次世界大戦前の台湾においてもみられ、前者を熟蕃、後者を生蕃とそれぞれ称し、区別した。なお現在では、民族の団結を破ることになるなどの理由から、このような用語は使用されていない。同様に「蕃」も差別用語として使用されていない。

- 31) しかしながら、かようなヤオ族の伝承および漢籍史料の記載からの歴史に関しては、竹村卓二が指摘するような批判もみられる(竹村 1981: 245-248)。

すなわち竹村卓二は、第1点として、ヤオ族を筆頭に西南中国に分布・居住する少数民族については、各民族の呼称体系が12~13世紀(宋代に相当)を境に急に全面的に改変されている。それ故、この時代以前においては、個々の少数民族の名称を史料から特定することは大変難しいといえる。つまり、武陵蛮、長沙蛮など地名を冒頭に冠した呼称方法に代わって、獠(瑤の異字)をはじめ現在でも用いられている名称が登場するのは、12~13世紀以降だからである。

第2点として、歴史的にヤオ族は長江中流域から西方あるいは南方へと大移動を開始するが、その最大の理由は、宋王朝にみられるように、「蛮寇」討伐を大義名分とする華南地方における漢民族の進出であり、そこに植民地を確保しようとするものであった。しかし、かかる点は、正史を中心とする漢籍史料の記述では十分に述べられていない、という。

以上述べたように、竹村卓二は、伝承や漢籍史料の記述だけでは、ヤオ族の歴史が十分に解明できないと指摘する。この点に関して、論点

としては大いに賛同できる。しかし、上述の竹村卓二が唱える批判の第1点にみられるように、ヤオ族の名称の改変が行なわれたのは12~13世紀ではなく、それ以前の南北朝時代(420~589年)やそれに続く隋時代(589~618年)にも、既に莫徭(瑤の異字)という名称が例えば、『隋書』巻31、志第26地理・下などの正史に記されている。このことから竹村卓二が主張する12~13世紀にヤオ族の名称が最初に登場したとするのは誤認であろう。すなわち、漢籍史料からも分かるように、12~13世紀以前においても、漢民族の間ではヤオ族の実態がある程度正しく把握されていたのではないかと推察できる。

- 32) 現在においても、多くのヤオ族は民族衣裳を常用している。この点は、西南中国に分布する少数民族の大半が人々の集まる定期市や正月などの「ハレ」の日においても、漢民族風の服装に変化してしまっている点とは大いに異なっている。かかることは、近くに分布しているミャオ族と同様に、ヤオ族が民族衣裳を着用することにより、民族としてのアイデンティティを堅持することに努めているように思える。しかし近年、少数民族居住地域の近代化つまり漢民族文化の影響を最大に受け、民族衣裳を着用しない若者が増加している。

- 33) 中国では下位の分派集団のことを支系と称するのが一般的である。しかし本稿では、かかる用語を使用しなかった。理由は、中国では少数民族を言語系統的に分類する場合、語系という用語が使用される。本稿では、この語系と混同される危険があるので、分派集団のことを支族という用語で統一した。

- 34) この支族は貴州省で唯一のヤオ族に関する研究書(柏・史・石 1990)を参照しても、居住している集落数が3ヶ所、人口が2665人(2004年現在)と小規模なので、何と呼ばれているかが不明で、郷人民政府などで聞いても不明であった。そのため、習慣的に住んでいる地名をとって「油邁ヤオ」族と称していたのであった。2004年8月下旬の現地調査の折、かつては綿花を栽培しており、それからとれる綿実や綿糸の販売が最大の収入源であることを聞いた。そこで、集落で最年長の古老に、以前何と呼ばれていた

- かと聞くと「藍靛ヤオ」族と呼ばれていたという返事が返ってきた。綿布は藍染めをするのに最高の布地で、「藍靛ヤオ」族は伝統的にかかる優れた技術を有している。このことから、「油邁ヤオ」族は、「藍靛ヤオ」族にほぼ間違いないと思われる。なお「藍靛ヤオ」族は、国境を越えてベトナム北部の山岳地帯にも分布している。
- 35) 同様の分派集団の区分はミャオ族にも該当する。しかし、ミャオ族の場合、女性が常用する民族衣裳（具体的にはプリーツスカートの色）が基準とされた（田畑 1994: 38—39、田畑他 2001: 171—172など）。
- 36) 拙論（田畑 1977: 77）でも指摘したことがあるが、従来では、中根千枝がその著作の中で「民族を同一言語を話し、共通の風俗習慣をもち、他の人々に対してわれわれという意識をもつ人々」（中根 1987: 48）と定義したように、民族とは同一言語を母語とする集団と看做すことが一般的であり、そのことが特定の民族集団と他の民族集団とを識別する最大のメルクマールとされてきた。かかる点からもヤオ族の支族を言語学的に分析する必要が認められるのである。
- 37) 盤朝月の区分は、中国領に分布・居住するヤオ族のみが対象となっており、国外に居住するヤオ族は対象とされていない。現在における中国人研究者の限界といえる。かかる点も早期改正されることを希望する。なお、盤朝月の論文に基づいて、ヤオ族の支族について論じた拙論（田畑 1987: 77—86など）も参照のこと。
- 38) 盤朝月は、ヤオ族の人口を約120万人としている（盤 1988: 91）。しかし、同論文に記載されている各支族の人口数を合計すると約139.2万人となり、数値が合わない。ヤオ族の支族別人口統計は1982年以降公表されていない。
- なお当時の人口センサスでは、ヤオ族は140万3664人となっている。また最新の2000年人口センサスでは、263万人7421人とされている。このように、ヤオ族の人口が近年急速に増加したのは、第1点として、いわゆる「一人っ子政策」に対して、少数民族の場合例外的に2名以上の子供を生むことが黙認されていること、第2点としては、漢民族と少数民族が結婚した場合、従来ではその子供は漢民族籍にするケースが多かった。しかし、「一人っ子政策」後、子供は少数民族籍となるケースが増加したこと、第3点としては、人口調査が正確となり、実際の数値に近づいたことなどがあげられる。「一人っ子政策」と少数民族に関しては、拙論（田畑 2003・B: 94—102）で論じたことがある。
- 39) 1982年のヤオ族の人口を約139.2万人として計算した。なお、ヤオ族の支族別人口は1982年以降公表されていない。
- 40) 竹村卓二によれば、この集団の最大の集中地区である大瑤山（1710m）を中心とした広西壮族自治区北西部の山岳地帯よりも、その移動先であり、また最近まで活発に移動を行っていた。広西壮族自治区北部やインドシナ半島北部の山岳地帯にその特徴がより顕著にみられると指摘する（竹村 1981: 23）。過山ヤオ族には、「盤ヤオ」族の他「尖頭ヤオ」族、「紅頭ヤオ」族、「角ヤオ」族、「山子ヤオ」族、「板ヤオ」族など10種類以上の支族が存在することが確認されている。これらの各支族は、伝統的に移動生活に従事していたという点が共通しているが、生業形態、生活、住居、習俗および服装などが微妙に異なっているとされる（盤 1988: 91—93）。
- 41) 深山ヤオ族と総称される集団は、自称を「ミイェン」（mjɛn²¹）という。「八排ヤオ」族が代表であり、「正ヤオ」族や「茶山ヤオ」族などの支族が所属している。
- 42) この他、ミャオ語系に所属する「紅ヤオ」族の一部が漢語方言を話す。それ故、この漢語方言を話す「紅ヤオ」族の一部も、この支族に加えることもある。
- 43) かかる点に関して、近年では本文で言及したヤオ族の支族に関するような問題をも含めて、民族それ自体が実体を伴わない幻想ではないか、という議論も存在する（スチュアート 2002など）。
- 44) 竹村卓二のヤオ族の分布に関する考察は非常に優れており、完成度も高いといえる。それ故筆者は、ヤオ族の概略を検討するとき、大いに利用させていただいたことがある（田畑 1966: 55—64、田畑他 2001: 117—120など）。
- 45) これらの呼称は、中華人民共和国成立以前の

名称であり、現在ではショオ族が野人などと称されることはない。

- 46) 個々の支族の主要分布地域に関しては、多くの著作(広西壮族自治区編輯組編 1984~1987、竹村卓二 1981:5-79、松村 1973:232-238)を参照した。

引用文献

- 上山春平編(1969):『照葉樹林文化—日本文化の深層—』(中公新書)中央公論社
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助編(1976):『統照葉樹林文化—東アジア文化の源流—』(中公新書)中央公論社
- 《過山榜》編輯組編(1984):『瑤族《過山榜》選編』(国家民委民族問題五種叢書之一、中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)湖南人民出版社
- 金丸良子(1994):「いわゆる「過山榜」に関する一考察」中国研究(麗澤大学中国研究会)3、1~17頁
- 胡耐安(1966):「説僑」、張其昀主編・辺疆論文編纂委員会編纂『辺疆論文集 第1冊』国際研究院・中華大典編印会 568-587頁
- 広西壮族自治区編輯組編(1984~1987):『広西瑤族社会歴史調査 第1冊~第9冊』(国家民委民族問題五種叢書之一、中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)広西民族出版社
- Savina, F.M. (1929):《Monographie de Hainan》Hanoi
- 佐々木高明(1991):『日本の歴史① 日本史誕生』集英社
- 白鳥芳郎(1975):『僑人文書』講談社
- 白鳥芳郎編(1978):『東南アジア山地民族誌—ヤオ族とその隣接種族—』(上智大学西北タイ歴史文化調査報告書)講談社
- スチュアート・ヘンリ(2002):『民族幻想論 あいまいな民族、つくられた人種』解放出版社
- 竹村卓二(1979):「過山ヤオ族の二つの起源神話:《槃瓠》と《渡海》—種族的アイデンティティの生成と淘汰—」『国立民族学博物館研究報告』3-4、なお同論文は若干の補正がなされて竹村卓二(1981):『ヤオ族の歴史と文化—華南・東南アジア山地民族の社会人類学的研究—』弘文堂、221-290頁所収
- 竹村卓二(1981):『ヤオ族の歴史と文化—華南・東南アジア山地民族の社会人類学的研究—』弘文堂
- 田畑久夫(1994):「中国雲貴高原の自然と住民(10) —山棲みの少数民族を事例として—」『学苑』656、42-44頁
- 田畑久夫(1997):「中国雲貴高原の自然と住民(16) —山棲みの少数民族を事例として—」『学苑』688、77-86頁
- 田畑久夫(2003・A):『照葉樹林文化の成立と現在』古今書院
- 田畑久夫(2003・B):「人口政策と人口移動」中藤康俊編『現代中国の地域構造』有信堂 87-113頁
- 田畑久夫(2004):「槃瓠神話の変化」『アジア遊学』67、勉誠出版、72-83頁
- 田畑久夫・金丸良子(1989):『中国雲貴高原の少数民族—ミャオ族・トン族—』白帝社
- 田畑久夫・金丸良子(1995):『中国少数民族誌 雲貴高原のヤオ族』ゆまに書房
- Tabata Hisao・Kanamaru Yoshiko(1996):"The Life Style of the Yao Tribe In the Unkwei of China"『学苑』674、55-62頁
- 田畑久夫・金丸良子・新免康・松岡正子・索文清・C.ダニエルス(2001):『中国少数民族事典』東京堂出版
- 《中国少数民族社会歴史調査資料叢刊》福建省編輯組編(1986):『畬族社会歴史調査』(国家民委民族問題五種叢書之一、中国少数民族社会歴史調査資料叢刊)福建人民出版社
- Davis, H.R. Major(1909):"YÜN-NAN The link between India and the Yangtze" Cambridge Univ.London、田畑久夫・金丸良子訳編(1989):『雲南—インドと揚子江流域の環—』古今書院
- Đông Nghiêın Vãn, Chu Thâi So'n, Lu'u Hư'ng(2002):"Ethnic Minorities in Vietnam" Thé Gi'o'i Publishers, Hanoi
- 中根千枝(1987):『社会人類学—アジア諸社会の考察—』東京大学出版会
- 柏果成・史繼忠・石海波(1990):『貴州瑤族』貴州民族出版
- 盤朝月(1988):「瑤族支系及其分布淺談」『貴州民族研究』第1期、91-95頁

ヤオ族の評皇券牒（I）

黄钰（1988）：「瑤族《評皇券牒》初探」喬健・謝劍・胡起望編『瑤族研究論文集』民族出版社
松本信廣（1941）：「槃瓠伝説の一資料」加藤博士還暦記念論文集刊行会編『加藤博士還暦記念東洋史集説』富山房、769—784頁所収
松本信廣（1943）：「河内仏国極東学院所蔵安南本書目」『史学』13-4、117—204頁
村松一弥（1973）：『中国の少数民族—その歴史と文化および現状—』毎日新聞社
《瑤族簡史》編写組編（1983）：『瑤族簡史』（中国少数民族簡史叢書）広西民族出版社

山本達郎（1955）：「マン族の山関簿—特に古伝説と移住経路について—」『東京大学東洋文化研究所紀要』7、191—270頁
Labor, F., Gerald, M., Hickey, G., Jokn, K.M. (1964) : "Ethnic Group of Mainland Southeast Asia" Human Relation Area Files Press. New Haven
任美鏢主編（1982）：『中国自然地理細要』（修正版）、阿部治平・駒井正一抄訳（1986）：『中国の自然地理』東京大学出版会

（たばた ひさお 昭和女子大学大学院生活機構研究科生活機構学専攻 教授）

受理年月日 平成16年9月30日
審査終了日 平成16年11月30日